

平成21年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

<p>人間として生きぬく力を育てる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子</li> <li>・はげまし、支え合い、共に伸びる子</li> <li>・強い心とたくましい体をつくる子</li> </ul>
---

2 本年度の重点目標

<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意志で自主的に追求していこうとする姿勢を育てる。対象から目をそらさず、確かな力・豊かな心を身につける。</li> <li>・さまざまな体験を通して健やかな身体をつくることにより、のびやかでしなやかな精神を育む。</li> <li>・よりよい道徳的な価値にふれることを通して、心豊かな心情を育む。</li> </ul>
---

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	<p><b>確かな学力を形成するための取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。</li> </ul>	平成21～23年度文部科学省指定「英語教育改善のための調査研究事業」、国立教育政策研究所指定「『生活科』単元を創造するための重要観点の構築」などの、先進的な取組を行った。	A	
	<p><b>豊かな心を育むための取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。</li> </ul>	全校縦割りの総合活動において、子どもたち自身に各学年の発達段階に応じた役割を見出させ、主体的に活動を創り上げる取組を行った。	A	
	<p><b>健康な体を培うための取組</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。</li> </ul>	6年生全員による850mの大遠泳に挑む臨海合宿や5年生の氷ノ山登山など、自然に立ち向かい頑張り抜く体験活動を各学年で行った。	A	
学校運営	<p><b>組織運営</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。</li> </ul>	校長のリーダーシップのもとに企画会議（月1回）、教員会議（毎週）、各部会などを開催し、創意工夫と改善のための具体的方策を検討し、見直した。	A	
	<p><b>教育実習</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。</li> </ul>	大学の教員、学校教育研究センター担当教員及び本校教諭が協議し、実地教育の改善を図った。	A	
	<p><b>大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。</li> </ul>	附属学校園間連携委員会・三附属連携推進協議会などによって、意思疎通を図り、附属学校園の交流行事などの取組を実施した。	A	
	<p><b>保護者との連携協力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。</li> </ul>	愛校作業での400名近い（全保護者の80%）参加、1月末の研究発表会での保護者ボランティアスタッフによる支援など、保護者と学校が連携して取組を進めた。	A	

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>自己評価結果のAは妥当である。</p> <p>教育活動については、1年生からの継続した指導が成果をあげており、人間力を育てる教育が行われていることは、評価できる。このことは、6年生のリーダーシップに顕著に表れている。今後も、今の取組を継続してほしい。30年間貫いた教育目標や縦割り班活動等、時代が変化する中でも、今なお続いていることは素晴らしい。学力重視で物事を考えると総合活動や体験活動を維持していくことは難しいと思うが、今後も継続していくことの重要性は理解できる。テストで測れる学力ももちろん大事であるが、そうでない学力も大切にしてほしい。今すぐに結果が出なくても、社会人になったときに本校での教育がベースになっているとの評判を耳にしている。</p>
<p>自己評価の結果は妥当である。</p> <p>学校運営については、周辺の公立校に比べて、PTAのバックアップが大きいことを感じている。各行事・研究発表会でのPTAの支援体制が整備されていることは、大きな要因であるが、年間を通じての花壇づくりや登下校時の交通整理などの諸活動が、積極的に行われていることも学校運営に係る大きな支援体制だといえる。</p> <p>学校運営の方策として、もっと地域にアピールする必要がある。地域の学校への研究成果の発信や近隣校との共同研究等、附属学校ならではの方法で地域貢献していくことが求められているので、今後是非この取り組みを進めてほしい。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
研究活動	大学との研究協力 ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	兵庫教育大学・ベネッセコーポレーションとの共同研究「『活用型学習』の指導方法及び評価方法等の研究」等により、学外機関との連携による共同研究に取り組み、成果を上げた。	B	科学研究費補助金制度などを活用することで、附属学校教員と大学教員との研究協力関係の構築を図る。
	大学との連携体制 ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	実地教育Ⅶにおいて、大学学部生への授業等を附属小学校教員が実施した。（学校教育：副校長・国語科：国語部教諭4名・理科：理科部教諭3名・美術家教育法：図工部教諭1名・初等生活：生活科部教諭1名）	B	附属学校教員が学部の授業を担当する実践を今後も拡充することに加え、大学教員が研究実践の一環として附属学校での授業を担当する取組の実施について検討する。
	全国規模の研究協議会の開催等による地域を越えた普及・啓発 ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	平成21年度教育研究発表会を実施した。研究発表会には、鹿児島から北海道まで、のべ1200名を越える参観者があり、授業参観、研究協議や研究成果をまとめた出版物などを通して、本校の研究成果を広めることができた。	A	
	研究開発学校制度等の活用 ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用し、教育課程や指導方法についての先導的・実験的な研究を行う。	国立教育政策研究所教育課程研究センター「教育課程研究指定校事業（小学校：生活科、中学校：社会科）」、文部科学省「英語教育改善のための調査研究事業」などに取り組んだ。	A	
安全管理等	防災教育 ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	日常的な防災教育を推進すると共に、1学期に不審者対応、3学期に地震を想定した避難訓練を実施し、安全意識の向上・啓発に努めた。	A	
	健康・安全教育 ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	地区別児童集会などを通して、安全意識の向上に努めた。乳児と保護者を学校に招き、生命の尊さを学ぶ「赤ちゃん会」（4年生）の実施など、生命を尊重する取組を行った。	A	
	施設設備 ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	徹底した遊具の安全点検を行い、危険箇所全てを対象とした改修計画を具体的に進めるなど、施設設備の整備を推進した。	A	
	安全管理 ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	附属学校安全委員会を設置し、委員に保護者代表を置くことで広く意見を取り入れるよう配慮した。「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引」の見直しなど、児童の安全確保に必要な整備等について検討を行った。	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>自己評価の結果はおおむね妥当である。</p> <p>研究活動については、無理のない範囲で進めてほしい。大学との研究協力については、多岐にわたる研究に取り組んでおり、現状でも十分である。それよりも、今、目の前にいる子どもを大切に、先生方の無理のない範囲で教育実践・研究に取り組んでもらいたい。</p> <p>大学との連携だけでなく、地域の学校との研究交流を進めてほしい。このことは、すでに実施しているようだが、今後もさらに進めてほしい。</p> <p>改善の方策についても、おおむね妥当である。</p> <p>大学との研究協力については、外部の者から評価結果を見ると先生方が多忙な中で、一生懸命に取り組んでいるように見える。改善の方策に書いてあるように、科学研究費補助金制度を活用して、大学教員との協力関係の構築を図ってほしい。しかし、無理のない範囲で、実施してほしい。また、大学との連携体制についても、多くの先生方が、実地教育Ⅶの授業を担当されている。今後もこの取り組みを継続していくとよい。しかし、大学の先生方が附属小学校で授業をするという取り組みがないことは、残念である。中学校では、大学の先生が専門家として、子どもの興味・関心をひきつけるような授業をしていると聞いた。小学校でも、大学の先生による授業をぜひ実施してほしい。</p>
<p>自己評価結果を踏まえた意見。</p> <p>安全管理等については、今年度は、新型インフルエンザ対応が喫緊の課題であったが、附属小学校と大学のホームページでの情報発信にタイムラグがあったようだ。</p> <p>子どもの登校・下校時の安全確保の面では、附属小学校も地元にある学校ということで、社小の「見守り隊」が今後も継続して、活動協力していくつもりであるので、相互に協力しあいたい。</p> <p>学びの場を大切に考えた学校施設・設備が整えられており、素晴らしい学習環境を提供できている学校だと感じている。今年度は、遊具の安全点検を行い、改修工事を実施したということで、子どもたちが安心して過ごせる場を提供できていることは素晴らしいことである。</p> <p>その反面、大阪教育大学附属池田小学校での事件以後、校門が閉じられたままで、「閉ざされた学校」という感がある。かつては、校門が開放されていて、地域の人たちが自由に入出りできる「開かれた明るい学校」というイメージがあった。安全管理上、難しい面があると思うが、かつての「開かれた地域の学校」のイメージを取り戻してほしい。</p>